

社会安全学部のこれまで、そしてこれから

関西大学社会安全学部は2010年4月に創設され、2019年度には10年を迎える。創設以来、教職員が一丸となって、良い学部を作るために邁進してきた。まさに猪突猛進という言葉が当てはまるような日々だったと感じている。その甲斐があって、教育・研究・社会貢献のいずれの面においても素晴らしい学部となった。特に、社会貢献は本学部の得意とするところであり、高い社会的評価を得ている。社会人大学院生が多いのも、その一つの表れであろう。

学部外の方々から客観的な評価をいただくため、学部独自の外部評価を実施した。神戸大学名誉教授の奥村康司先生を委員長とし、前大阪府立大学長の奥野武俊先生、同志社大学社会学部教授の立木茂雄先生を委員とする評価委員会が2018年3月に設置され、2019年1月末に報告書を提出いただいた。その要旨は学部のホームページで公開している。研究、教育、社会貢献、国際化の4分野について評価されているが、全体的には合格点をいただけた。もちろん、すべてが完璧にうまく行っているわけではなく、今後改善して行かなくてはならない問題も存在する。しかし、それらの問題を踏まえても、わずか数年でこれだけの学部を作り上げたことは、教職員の努力の賜物だと思う。

では、今後の社会安全学部はどのように歩むべきか？これまでの創設時期と同様で良いのか？私は次のように考える。これまでは、数年間という短期間で急速に学部を完成させ、成功を収めた。しかし、これからは、持続的に学部を発展させていくフェーズに入る必要がある。すなわち短距離走から中長距離走に競技は変わる。中長距離走で良い結果を出すためには、短距離走とは別の走り方が必要である。それはどのような形なのであろう？学部としての目標や方向性は共有しつつも、各教員がそれぞれの興味や価値観に従って、重要と考える分野で成果を出していくことだと私は考える。学部全体で達成する大きな成果はもちろん重要である。しかし、各教員が異なる分野で様々な成果を出していくことはより重要であり、大学の本来あるべき姿だと信じる。個々の教員の中長期的な成果の集積が学部の成果であるし、多様な成果を持つことが学部の強みになると考える。

大学を取り巻く社会情勢や環境は今後も大きく変化していくであろう。それに対応するだけでなく、それを好機と捉えて、社会安全学部をより発展させていくためには、多様性や柔軟性が重要となる。すでに本学部の教員は極めて多様な専門性を有している。よって、その多様性を尊重し、それを活かすための柔軟性が学部には求められる。個々の教員がそれぞれの分野で存分に能力を発揮できる環境の整備が、最終的に学部の発展に繋がるはずである。研究のみならず、教育や社会貢献でもチャレンジなことをしていただきたい。もちろん挑戦には失敗がつきものであり、革新的で新規性や独創性が高いほど、失敗する可能性も高い。しかし、失敗を恐れず、挑戦していただきたい。それを許容できる柔軟さと寛容さを有しているのが社会安全学部である。

2019年2月

関西大学社会安全学部長・
大学院社会安全研究科長
高橋 智幸

